

意歟。吳音チャクなり。チャクはチャウとかよへり。ヨウは瑩歟。又腰笛の音歟」

『同書』同、四に「腰笛。ようてう 物語謠曲に「腰のえうてうぬき出し」といへるは腰のふえを拔出しといふべきを、事有りげにいほんとして、腰笛をすなはち笛の異名の如く覚えて書しなり。笛の唐音はテウなり。それを假名のまゝにテウの如くとなふるなり。笛を即エウテウといふ事は未見あたらず。又案に横笛又は瑤笛の音語歟」

二 山田以文 横笛 『平家談』ようてう。按ずるに永保元年二月十日『水左記』改元條云、「人々申云永長對馬音似<sub>ニ</sub>笛名<sub>一</sub>」これ其證とするに足る。サウテキと云へば其音玉敵に通ずるを以ての義歟。猶後考を俟。

(錦所談百家説林續編上の一八三頁)

二 ヨウデフ

伴 蒿籟

笛をヨウデウと『平家物がたり』などに書たり。笛の事とはしりても、其由をさだかにせる人なし。『體源抄』は樂家の書なるに、笛の下に腰打といふ字を小書にしたるのみ。腰打とても其義辨へがたきを、おのれ思ひえたり。是は横笛の字を吳音によめるにて、何の子細もなきこと歟。笛は入聲の字にて、テキに通ひテフと書べきをテウと誤るより辨へがたく成しならん。又笛字チャクともよむことは、笙<sub>シヤウ</sub>・笛<sub>チヤク</sub>・琴<sub>キン</sub>・篋<sub>クワ</sub>と連續したる語にてしらる。同じ字も昔よりのならはしにて、唱へ轉ずるなり。

(閑田耕筆百家説林續編下一の七八頁)

三 ヤウデウ

谷川士清 やうてう 『平家物語』に「腰よりやうてう拔出し、ちつと鳴して」といへるは横笛の音轉。對馬音なるべし。『中山大納言記』に見えたり。

或は「ヤウシヤウにて陽聲の音。笛の異名なり。陽聲調は横鐘管をもて、冬至の氣を候ふ。よて陽氣の動くをもて名を得たる也」といへり。

(倭訓栞)

四 ヤウデフ

物集高見 やうてふ 横笛。よこぶえに同じ。横笛ワウデフを入聲によびなしたるなれば假字もヤウデフなるべし。

(日本大辭林)

五 エウチヤウ

小山田與清 笛をエウチヤウといふ事、『義經記』七八丁オ・廿四丁ウ・廿五丁ウ・廿六丁ウ 北國落の條に見ゆ。『盛衰記』廿五丁オ 『體源抄』五三丁 笛の條 『續教訓抄』十一一丁オ・三丁

(松屋筆記圖書刊行會本、第二の五五九頁)

六 ヤウデフ・ヤウチヤウ

落合直文の『ことばの泉』に「やうてふ 横笛。よこぶえにおなじ」 「やうぢやう 横笛。やうてふにおなじ」

よこおる(横)

一 ヨコホル

源 俊賴 『俊秘抄』歌學文庫二の五九頁「かひがねをさやにもみしかけ、れなくよこをりふせるさやの中山」の解に、「よこをりふせるとは、ことのほかにたかくながき山なれば、よこおりに編者いふ、顯昭が袖中抄に引けるには四郡とかけり。はごかりてかひのしらねをふたげてみせねばよめるなり」といへり。



藤原仲實の『綺語抄』歌學文庫二の四四頁に「とほつあふみとするがのとのあひだに、さやのなかやまといふ山のあるが、四箇にはぐかりて、甲斐のしらねと云山をみせぬなり」とあり。「四箇にはぐかりて」とあるは『俊秘抄』を参照するに、四郡の意と聞えれば、誤字脱字などのあるるべし。然らば俊頼の説は、既に仲實のいふ所なりしなり。『顯昭古今集註』續々群書類從第一五の一七三頁に引ける藤原教長の説また四郡の意とせり。

藤原清輔、四郡の説について『奥義抄』歌學文庫一の〇七頁に、「ある人の云、さやの中山は四郡にわたりてあれば「よこほりこせる」とはよめる也。「よこほりくやる」とかさたる本はひがこと也。「よこほりす」といふことなしと申せども、『土佐の日記』には、「ひんがしのかたに山のよこほれるをとへば、やはたのみやといふに」と侍り。さる詞もあるにこそ。やはた山四郡にわたれ

りとも見えねば、ひがきにはよもあらず。但よき本に「よこほりこせる」とはべるぞあやしき」といへり。

藤原範兼も『和歌童蒙抄』國文注釋全書本の三一頁に「土佐日記」を引きて横たはれる意とせり。顯昭も(袖中抄歌學文庫一の二七頁)「よこほりこせる」とは、ふせると云詞なり。或本にくやるとかけるも、ふせると云詞なり。ふせるとかける本もあれど、それはあまねからず。證本とおぼしきはこせると云へり」といひ、古語こやせるを引きて、「ふせるといひ、こやせると云は同心なり。こせるといふもヤの字を略せるなり。くやると云も、コとクとは同五音なり。さてセの字を略していへるなり。それをあしく心えたる人、よこほりとは四郡也。こせるとは四郡に越たるといふはいはれず。よこほりとはよこたはゆる心なり」と説けり。編者いふ、四郡の説の非なるはいふ迄もなし只古き説なればこ

これに關せる説を併せてこの條に出せるなり。

二 清水濱臣

今おもふにホの假字なること明らかし。いかにとなれば、『古本風俗歌譜』甲斐に、此歌をあげて、「與古保利太天流」とあり。

又『袖中抄』に擧し四郡の説も、もとより義はとりもちふるにたらねども、ヨコホリのかなの證にはなすにたれり。いかにとなれば此四郡をヨコホリの假字と心得んことは、いにしへいまにかよはしてなきことなれば、ヨコホリの假字ならんにはいかでふるく四郡の意にはあやまりつたふべき。こもヨコホリと書來れる明證也。

さてヨコホリと書て、こゝろは則よこたはる意也。ホはかるく心得べし。尤半濁にてヲの如く唱ふべし。くつほるのホと同じ編者いふ、なほくずおるの條を参照すべし。

三 香川景樹

よこほれるはヨコホレルにて、横ふるを

のばへいふ也。フリは襟にて、宮ふり手ふりなどのフリ也。フをホといふは音便にて、畢竟よこさまといふに其意かはることなし。『古今』に「よこほりふせるさやの中山」とあるも、横ふりふせるにて、みな横さまに靡きたる山のすがたをいへり。(土佐日記創見下之末の四〇丁)

四 橘 守部

横は常によこたはるとも活けり。其波を保に轉じてよこほるとはいへるなり。いとほしいとほし、おもはゆる・おもほゆるなど云類をあはせみればとみにしらるゝことなり。(鐘の響下の二三三丁)

五 富士谷御杖

よこほるといふ詞、横折とかける本ありて、宇萬伎ぬし音蹊ぬしなど、ヲもじにつきて折の義なりといはれき。しからば堅なるべきものを、横さまに折れる形容にていふ詞なるべし。

(答問雜稿一の二五丁)



されど『萬葉集』卷四「衣手爾取等騰己保里哭兒爾毛益有吾乎置而如何將爲」また卷五長歌上「漸々爾可多知都久保里朝々伊布許登夜美靈剋伊乃知多延奴禮云々」また卷十九に「伊伎騰保流許己呂乃宇知乎思延宇禮之備奈我良云々」長歌上 これらのとどこほるつくほりいさどほるといふホルとおなじ例なる詞にやとおぼしければ、ホルとあらんぞしかるべき。

(土佐日記燈下の二六八丁)

六 大槻文彦 よこほる 横。横を活用せる語。横折の義とするはあらず。自他違へり。

(言 海)

橘 成員(倭字古今通例全書よこたへ) 本居宣長(古今集遠鏡全集第五七七八頁) 石川雅望(雅言集覽) 近藤真琴(ことはのその) 佐藤誠實(語學指南三の二) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(詞の泉) 笹村良昌(假字の栞)等

けり。

### れんじやく(連着)

#### 一 レンジヤク

一 谷川士清 れんじやく『江次第』に連着鞆あり。或は連着に作る。編者いふ、太平記卷三九(芳賀兵衛入道軍事)に「連着ノ鞆」とあり。『説文』に「蕪蒲子可以爲平席」と見えたり。商人の肩に掛る物をいふは一書に歛債とかけり。編者いふ、一書とは合類大節用集をいへるにはあらざるか。同書(七の二六丁)に「歛債・連着」(太平記)・連着と見えたり。但し肩に掛る物をいへるか。鞆の一種をいへるか詳ならず。連着と並べ挙げたるによりて考ふれば鞆をいへるが如し。連着より出たるなるべし。

(倭 訓 栞)

二 大槻文彦 れんじやく 連尺。連着かとも云。物を負ふに用ゐる具。二片の板に繩を繫け背に付く。

れんじやく(連着)

ホの假名とし横たはるの義とせり。

#### 二 ヨコヲル

賀茂眞淵 横折くやるは横折臥にて、よこたをりふせるなり。クアルは古言なり。今の本にふせりと有はいにしへならず。仍て改めつ。

(古今和歌集打聽全集第一の一一九七頁)

松永貞徳の『歌林樸榭』九卷に「四郡ヨコボリの説は諸抄に不用。『土佐記』をひけば横折の説を可用」とあれば、横折の説は古より唱へし説なり。

契沖が『古今餘材抄』國文注釋全書に、よこをりとヲの假名を書けるは同じく横折の説なるべきか。

有賀長伯(和歌八重垣卷五の二〇丁) 谷川士清(倭訓栞) 岸本由豆流(土佐日記考證下の三六丁) また横折の義とし、『俚言集覽』小田清雄(標註土佐日記講義)もヲの假名を書

(言 海)

高橋五郎の『いろは辭典』にも「れんじやく 蕪債連尺・連着 物を脊負ふに用ふる繩」とあり。

#### 二 レンヂヤク

喜多村信節 れんぢやくといふ猿樂狂言に、「目代この所御ふつきに付新市をたていと御事故高札をあぐる是に打まうせう女わらは、此邊にひとり住ゐして酒をうる者じゃこの處御ふつき故しん市がたちまうする一のたなをりやうしたらばすすく、までつけてくだされうと仰せらるゝわらは一の店をもちましやうと思ふてまだ夜の内にてた參る程に市場じゃ是が一のたなじや是にしませう云々」狂言には「柿賣」「かつこ」「炮烙」等に、多く新市一の店などのことあれども、此れんぢやくには故あり。物を背負ふ具をレンヂヤクといふ。今是を連雀と書は鳥の名にし



て、器物にあらず。『下學集』増補に連着と書るがよし。レ  
ンジャクは假字だがへり。すべて何によらず、負ひ又は荷  
ひてありく商人をレンヂャクと云し事と見えたり。天正廿  
年十月晦日町年寄三人へ賜りし御書付に連着町とあり。

(嬉遊笑覽存探叢書本二〇の二丁)

落合直文の『ことばの泉』に「れんぢやく 連着」

(一)物を荷ふときに用ゐる具。……(二)轉じて、物を荷ひ  
て賣りあるく商人」といへり。

● 参考

伊勢貞丈の『貞丈雜記』一三の三五丁に「れんぢやく 鞆と云  
は、大ぶさ小ぶさの物名也。『延喜式』彈正曰「凡六位以下鞆  
鞆總不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>連着<sub>一</sub>但聽<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>鞆衢<sub>一</sub>及後末云々」

此心は延喜年中の法に、六位以下は鞆の總を並べつらね  
て付たるをば、用る事をゆるされず。但鞆の辻の所と鞆の

端とに總を付る事をば、御免被成と也。鞆の辻とは、くみち  
がへの所を云也。連着の二字をレンヂャクとよみて、總を  
いくつもならべつらねて着る也。此連着に大ぶさ小ぶさの  
兩品あり。大ぶさを厚ぶさとも云也。『鈔抄』曰「古鞆チイ  
サク總短近代鞆甚大總長云々」然らば上古は小總にて、其  
後大總は出來たる物也。又鞆の辻にばかりふさ付たるをば  
辻總といふ也。『桃華葉集』に連着小總辻總と見えたり。  
『延喜式』に着<sub>二</sub>鞆衢<sub>一</sub>とあるは此事也」といへり。  
なほ『古今要覽稿』國書刊行會本第  
二の六九五頁には連着鞆の圖をい  
したり。

ろうたしの條参照

一 ラウタシ

一 源 光行 『河海抄』國文注釋全書  
本、二七三頁に「おもひけ給け  
しさいとらうあり 勞 水原抄」とあり。

古き抄物大かたこの説によりて勞の音とせるが如  
し。さてその意義につきては、

『岷江入楚』國文注釋全書  
本上の五二頁に、三條實枝の説として、「勞

也。あまりうつくしうたをくとしたる人は、いたは  
しくおもはるゝこゝろなり。我心を勞して人に懇にす  
る心也」といふ説をあげたり。伊勢貞丈が『安齋隨

筆』故實叢書本卷  
五の一七二頁に、「ラウは勞の字なり。イタルと  
よむ。婦女の形の美麗なるを愛して、我心を勞すべき  
様に思ふを云ふなり」とあるも同意の説なるべし。

五井純禎は『源語梯』中の二  
五丁に、「らうたげ うつく  
しうてよわくとみゆるなり。……ラウは勞の字なる  
べし。勞すればくたびてよわきもの也。およそうるは  
しきものはこはくしくはなきもの也」と説きたり。

山岡俊明が『類聚名物考』第四册の  
五五九頁に、「らうたげ 勞  
々しき氣色をいふ。勞は煩勞などいひてわづらはしな  
どよみたれば、物を思ひしみ引入たる女などの、さはや  
かならず病惱の有りさまなるにたとへていふなり」と  
いひ、萩原廣道が『源氏物語々釋』九丁に、「らうたし  
は勞痛の意にて、苦勞の多く甚しきを見ては、きのどく  
に思ふ意より出たる語也。さてそのきのどくに見ゆる  
ものは、憐アハレのかゝるものなる故に、轉りてはかはゆくあ  
いらしき意にもなれるなり」といへるもほゞ純禎と  
同意の説なるが如し。  
また、鈴木 脰の『雅語譯解』にも「勞いたし歎」  
といひ、大槻文彦の『言海』にも「勞甚しの約と云」  
とあるは、我心の勞多き意か。人の勞多き意にか明な  
らず。  
二 素寂 『紫明抄』内閣本、天に  
の二〇丁に「らうたき 良也」と



注せり。

此の他、契沖の『源註拾遺』國文注釋全書 本、三〇頁 賀茂真淵の『源氏物語新釋』本居宣長の『玉の小櫛』全集第五の 共一二五七頁 にラウと書し、石川雅望の『雅言集覽』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』笹村良昌の『假名の栞』またラウの假名遣とせり。

### 二 ラフタシ

四辻善成 『河海抄』國文注釋全書 本、二七三頁「おもひつけ給けしきいとらうあり」といへる語の解に、「案之龍ある歟。上龍しき體也。ラウラウシキともラウタキともいへる同事也」とあり。

但し『同書』頁一八「らうたきの解に、」**勞・良・亮**日本紀ほけくとしたる心なり』『同書』三頁「らうたけにの注に**勞・亮**日本紀」とあるは疑はし。或は、龍の意なると**勞・亮**

良等の意なるとありて、別語とせるか。然らば假名遣またラフ・ラウの別あるべし。

谷川士清も『倭訓栞』に、「らうたし 勞字なりといへり。いたはり惜む意にいへりとぞ。されどらうたげとも見えれば、龍のたけたる意にいへる成るべし。らうたうといへるも同じ。さればラフと書くべし」といへり。

## ろろろし

ろろたし  
の條参照

### 一 ラウラウシ

#### 一 五井純禎

らうらうし らうたきに同じ。

本居宣長は『玉の小櫛』全集第五の 一二五七頁に「らうたげな(源語梯 中の二六丁)

りしを 此詞は俗にアイラシキといふ意なり。さてついでにいはむ。らうたしとらうくしとは其意いたく

ことなるを、詞のさまのよく似たる故に、あひ誤る人有。らうくしは俗にいふ物の**功者**なる意なり」といへり。

### 二 鈴木 眼

らうらうしは、功者ナ・コウノイツタチ。ラウは本勞なり。勞は仕官の年功のことなり。

(雅語譯解)

萩原廣道が『源氏物語々釋』九丁に「らうくしは勞々しの意なり。これは功勞の勞にて、功勞をつみたるものは何事にも功者なる意に轉じたる也」といへる、また同意なり。

大槻文彦(言海) 物集高見(日本大辭林) 落合直文(ことばの泉)等また、勞々の義とし功者と解せり。

### 三 石川雅望

勞々シ・良々シの二意に解せるが如し。

『雅言集覽』らうくしの條に、

「らうくし 功者・ヨキキ  
マヘ・ヨキキ形

○らうたげとはことなり。俗に物の功者なる意なり。勞々し也。『枕草子』七廿四。人のなぞく合せし所に「かたくなにはあらで、さやうの事にらうくじかりけるが」○これら功者ともいふべし。……『源氏物語』幻。六。紫の死うせ玉ひし後、中將を御覽じ玉所に「心ばせかたちなどもめやすく、うなみまつにおぼえたるけはひ、たゞならましよりは、らうらうしとおもほす」○これら功者なることにてはなし」といひ、

更にらうくしの條に、『源氏物語』『紫式部日記』『空穂物語』『枕草子』『狭衣物語』等の例を多く挙げ、『源氏物語』初音。二「少しおとなびたるかぎり、中くよししく」とあるは、ラウくしを訓にていへるなり。『枕草子』二一七「小舎人はちひさくて、髪のうるはしさが、すそさはらかに聲をかしうて、かしこまりて物など云たるぞりやうくしき」○此枕草子に「リヤウくシキとあり。『源氏物語』葵に「心ばへらうくし



し」とあるをおもへば、よし／＼しきといふことにて、  
功者なることももるか」といひ、

また『源氏物語』末つむ。「らう／＼しうかどめきたる心  
はなきなめり。いとこめかしうおほどかならんこそらうた  
くはあるべけれ」『空穂物語』藏びらき。下四十九「顔かたちさよう  
なれば、あてにらう／＼しき人といへど、あばれたる所にか  
すかなるすまひなどして」その他多くの例をあげて、「良  
々しく也。功者なることにはあらず」といへり。編者いふ、この良々

の説は北村季吟の枕草子春曙抄(二の一七丁)りやう／＼しきの注  
に「良々也」とあると、下に引ける河海抄の注とに據れるなるべし。  
近藤真琴も『ことはのその』にラウラウの假名遣と  
し、し勞々良々の二義とせり。

四 清水濱臣 老々しくなり。よろづの事に功者なるを  
いふなり。

(源氏物語新釋賀茂真淵全集第四の三七三二頁)

二 ラフラフシ

四辻善成 『河海抄』國文注釋全書 本一三九頁「ちかき世にとのみ  
なんらう／＼しく」の注に「良々亮々日本紀案之りやうり  
やうしきにはかはるべき歟。是は上臈しき心也。臈々也」

とあり。同書(二〇六頁)「もていでらう／＼しう」の解に、「良々亮々(日本紀)りやう／＼しき詞也。せいのおいさきなどを、りやうりやうしきと云。非其儀稱美詞也」とあり。これを以て考ふれば、良々或は亮々の意なるらう／＼しと臈々の意なるらう／＼しと二つありて別語なりといふ説なるか。さらば假名遣もラフ・ラウの二様となるべし。猶らうたしの條を参照すべし。

賀茂真淵の『源氏物語新釋』全集第四の 三七三二頁に「らうらうしくは臈々にて上らうしきなり」といひ、  
谷川士清も『倭訓栞』らふたけての條に、「臈長ての義なるべし。らふ／＼しきも臈々しき義なるにや」といへり。

わかんどうり(王孫)

一 ワカンドウリ

一 素寂 わかむとありの日や 王家無等倫也。皇孫云。我無等倫。『法華經』化城喻品「世雄無等倫」

(紫明抄内閣本、天の四五丁)

『弘安源氏論議』經濟雜誌社本、羣書類 從第一二輯の四三〇頁に、「親行が釋する處の王家無等倫。『史記』殷本紀に、王家をささむといへり。『法華經』化城喻品に、「世雄無等倫」といふことあり。かの大史公がかしこさあとをひき、この一乘經の妙なる詞を引合て釋せり」とあり。

行阿の『原中最秘抄』經濟雜誌社本、羣書類 從第一輯の三九六頁 四辻善成の『河海抄』國文注釋全書 本八四頁をはじめ、古き『源氏』の注釋書大かた此の説によれり。

伊勢貞丈も『安齋隨筆』帝國圖書館本 一九の六六丁に「王家無等倫と書て、天子の御血筋をうけたる王孫の人々を云也。

わかんどうり(王孫)

五八九

二 『俚言集覽』愚按

王家無等倫和漢通。王家通等の説をあげて、「等倫ならばトウリの假字。通ならばトホリの假字なり。混ずべからず。…按、無等倫の字はいかが。近世、王家統理の字を用ゐたる方よろしかるべし。『和訓栞』の和漢通といへるは『河海』の一説より出たる説にて信用しがたし」といへり。源註拾遺・源氏物語新釋にも王家通の説を河海抄に見えたるがごとく注したり。されど國文注釋全書本を檢するに、いまだ見當らず

二 ワカントホリ

一 或人の説 『原中最秘抄』經濟雜誌社本、羣書類 從第一輯の三九六頁に、「或説云、和漢に通たる達者の事也」とあり。

行阿は「此義不可用之」とてこれを斥け、谷川士清は此の説を用ゐたるなるべし。『倭訓栞』に「わかんとほり」『源氏』に多くいへり。和漢通の義也。又



「猶ざえを本としてこそや」と玉ひの世に用ゐらるゝ事もつよう侍らめ」編者いふ、源氏物語少女の巻に見えたり。といへるも此意なり。源順文に「賢太夫之心通和漢者」といひ、『八雲御抄』に「和漢家」『東鑑』に「可令好和漢才給」と『神皇正統記』に「和漢才覺」と見えたる同義なるべし」といへり。

二 契沖 わかむとほり 王家無等倫の義物に見えたる證なくばあたるべしともみえず。もし其義ならば又ムの字ははねずしてムトホリと下へ付てよむべき理也。

百濟王禪廣の末を、百濟王某乙といひけるを略して、王といひければ王家といふべし。さてそれを音便にワカンともいふべきは、催馬樂に「わいへん」我家などいふ例也。トホリすぢの心にて、王家の裔といふ心などにや。

『延喜式』に中納言眞世王の末を王氏といへり。又桓武天皇の御裔にもいへり。いづれの親王にもあれ氏を賜はら

てあるほどは皆王氏といふにや。王氏を王家といふべし。

(源註拾遺國文注釋全書本三四頁)

賀茂眞淵の『源氏物語新釋』全集第五の四六二五頁 加茂季鷹の『正誤かなつかひ』の説また同じ。萩原廣道も『源氏物語評釋』六の二丁に、『拾遺』の説のごとく王家のすぢといふ義なるべし」といへり。

また山岡俊明が『類聚名物考』第三冊の一四八頁に「或は王家無等倫といふ説もあれども、あまりにくだしくしければ、その頃の人の聲口とも思はれず。ワカはいかにも王家なるべし。ムドホリは嫡統あるは統通の意にて、音便によつてム字はそへていふなるべし」といへるも、大體は同説なり。

三 伴 信友 わかんどほり 信按、若御裔なるべし。其は『字鏡集』に裔字をトホリ・ハツコ・ハツムマコとよめるを思ふべし。

『北史倭傳』に「名太子爲和歌彌多弗利」(ワカミタフリ)と云へる、ワカミドホリを漢人のしか聞なしたる也。弗はホツ音なればホに用たるにてもあるべし。多は全

浙兵制の『日本風土記』にトの音に用ゐたり。さて『北史』通本、「利歌彌多弗利」とある利を、古唐

本に和とありと或人のいへり。編者いふ、藤井貞幹の好古日録(下の六一丁)に見えたり。必それ正しかるべし。

(増補語林倭訓栞)

石川雅望も『雅言集覽』に、「わかんどほり」『北史』倭國列傳、「王妻姓雞彌沒官有女六七百人名太子爲利歌彌多弗利」とあり。或人の云、古本の北史には利を和文字にかけりといへり。今の本は誤れるなるべし。しからば王孫をさしていへること、古き時よりのことなりとしらる。又考るに若皇子トホリを略せるにて、トホリは筋といへる心なるべし。といへり。

此の他、大槻文彦の『言海』には、「ワカンは大上の約轉か、……トホリは系意と云」と注し、近藤眞琴の

われもこう(草の名)

われもこう(草の名)

ワレモカウ

一 萩生徂徠 さく・さちかう・しをに・われもこう、皆漢語也。レは助語にて和木香といふ事にや。

(南留別志卷二の二丁)

林 道春の『多識編』六丁に「木香。左字毛久左。又和禮毛加宇。異名、密香。青木香。五木香。南木香」とあり。

二 加茂季鷹

われもかう草名。眞字未考。 破帽額敷。(正誤かな遣)



大槻文彦も『言海』に「われもかうワレモカウ割帽額ワレモカウ(紋)の義にて葉の形よりいふか」といへり。

村田春海は『若桂』一七に、季鷹の説を駁して「此假字正しき證もなく、草もたしかにしりがたし。世の物産の學をなす人は、地榆の事也といへど、さしたる證もなし。此書に破帽額かといへるは、詞の釋と見ゆれど、破帽額といふ事、何のことわりも分ちがたし。もかうは草にたとふべき形の物にもあらず。いかなる心にてかゝる事をばいふらん」といへり。

三 屋代弘賢

『古今要覽稿』國書刊行會本第 五の二三九頁に『源氏物語』句なる「秋はよの人のめづる女郎花、さをしかのつまにすめる萩の露にも、をさく御心うつし給はず。老をわするさく、おとろへ行くふぢばかま、ものげなきわれもかうなどは、いとすさまじき霜がれの比ほひまで、覺しすてずなどわざとめきて、かにめづるおもひをなむたてゝこのまし

うちはしける」の文を引きて、「弘賢曰、よき香ある草のみめで、香をりなき花には心うつさずといふ香草のうちワレモカウをかぞへ入れたれば、茅の類、ならびに地榆蒼求ともにはかなはず。麝草のみ香氣あれど、ものげなきといふにかなはず。されば茅香なるべしといへり。茅香は「ものげなき」といふにもかなひ、「霜がれの比ほひまでおぼしすてず、わざとがましきまで香にめづるおもひをなしたてゝこのましく」といへるによくかなへり。そのゆゑは、生草にても香氣愛すべく、乾草にても浴湯香印香諸供養香等に用ること、『薰集類抄』にみえたり」といひ、

また『狭衣物語』三に、「かうぞめの御ぞどもに、あをさこさうすきわれものちりもの奉りたるも、いとゞにほひなくすさまじき心ちしたるにも……むさしの霜がれにみしわれもかう秋しもをぐるにほひ成けり……ひとりごとさへくちふたがりぬるを、なほいとわびしうおもひあま

り給ひて、冬ふかき霜がれの雪のあしたこそ、この色はをかしけれ。この比はあまりおとなしくこそ有けれとの給ふ」とあるを引きて、

『弘賢曰、これは一品宮の衣服を、狹衣の評し給ふなり。歌のまへに「ありし雪のあしたに、齋院のかれのがさねたてまつりし御ねぐたれすがたぞおもひ出られ給ふ。はなやかなる色あひよりも、めづらしくもみえしかなとまづおもひいでられ給ふ」とありて、心に齋院よりもこの宮おとり給ふとおぼすなり。われもかうは芳草なるを、「にほひなくすさまじく」とおぼせしは、あまりたかぶり給ふ心ばへをさして、「にほひなくすさまじ」とにや。さればこそ歌に「秋しもをぐるにほひなりけり」とよまれしなり。編者いふ流布本には、をとるとあるを、花鳥……此草は秋さかりなるものなり。さて常は其時節の物を相應にすめれど、こゝはその人からにあはせて、あまりなることゝおもはるゝゆゑ、「この

比はあまりおとなしくこそ」との給ふなり。おとなしくとはおとりたるといふ義なり」といひ、  
また『十寸鏡』草枕に、「院はわれもかうみだれおりたるかれのの御狩衣、うすいろの御ぞ、紫苑色の御さしぬさ」とあるを引きて、「弘賢云、「みだれおりたる」といへる茅香のさまあさらかなり。これによればこの比まではまぎらはしきことあらざるにや」とて、今世、茅の類、地榆蒼求、麝草の四種をいへど、皆誤にして茅香なりとし、さてその名義を釋きて、

『ワレモカウ』は和名にあらず。その證は、『本草和名』及び『和名類聚鈔』等にみえず。『古今和歌六帖』等にもみえず。よりに按ずるに、モカウとは茅香の轉ぜしにて、ワレとはワラ／＼としたる形故、ワラの轉語なるべし。『八雲御抄』に忘草を「わら／＼と有」と記させ給ひしぞ思合せらる。「閩人呼茅如麻」といふこと『本草綱目』茅香の條



われもこう(草の名)

下にみえたれば、唐土にも似たること有なり」といへり。

清水濱臣の『語林類葉』には、『久安百首』なる季道の歌 「野邊ごとに人もゆるさぬわれもかうこや今夜のむさのことくさ」 また安藝のよめる 「なげやなけをばなかれ葉のさりくすわれもかうこそ秋は惜けれ」といへる歌などを引きて、カウの假名とせり。

石川雅望も『雅言集覽』に『久安百首』なる季通の歌をあげて、ワレモカウとせり。

この他、近藤真琴の『ことばのその』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』笹村良昌の『假字の栞』またカウの假名遣とせり。

疑問假名遣 前編(學說の部)終

大正元年九月十七日印刷

大正元年九月二十日發行

疑問假名遣 前編 學說の部

定價金壹圓六拾錢

編纂者

文部省内 國語調査委員會

發行者

東京市日本橋區新右衛門町十六番地  
株式會社 國定教科書共同販賣所

右代表者 大橋新太郎

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿七番地  
石川金太郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿七番地  
株式會社 秀英舍

文部省  
著作權  
所有

發行所

東京市日本橋區新右衛門町  
株式會社 國定教科書共同販賣所



國語調查委員會御編纂圖書目錄

書名	冊數	定價	郵稅
片假名讀ミ書キノ難易ニ關スル實驗報告	全一冊	金貳拾五錢	金四錢
國字國語改良論說年表	全一冊	金貳拾錢	金四錢
方言言採集簿	全一冊	金貳拾五錢	金六錢
音韻調查報告	全廿九冊	金貳圓	金貳拾錢
音韻分佈圖	全一冊	金貳拾五錢	金四錢
現行普通文法改定案調查報告ノ一	全一冊	金貳圓	金四錢
口語法調查報告	全一冊	金壹圓貳錢	金拾六錢
口語法分佈圖	全廿七冊	金壹圓五拾錢	金拾貳錢
送假字要覽	全一冊	金八錢	金貳錢
漢字假字要覽	全一冊	金參拾五錢	金六錢
假名遣及假名字體沿革史料	全一冊	金四拾五錢	金拾六錢
口語體書簡文に關する調査報告	全一冊	金四拾五錢	金八錢
假名源流考證本寫真考	入帙全二冊	金貳圓貳拾五錢	金貳拾四錢
假名源流考證本寫真考	全一冊	金貳圓五拾錢	金拾六錢
平假家源流考證本寫真考	全一冊	金壹圓六拾錢	金拾六錢
疑問假名遣前編(學說之部)	全一冊	金壹圓六拾錢	金拾六錢



